

新潮文庫

繪 島 生 島

後 篇

舟 橋 聖 一 著



新 潮 社

しま いく じま え
島 生 島 繪
篇 後

定價は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草11 J

昭和三十四年九月十五日 發行
昭和四十六年十一月三十日 十 刷

著 者 舟^{ふな} 橋^{はし} 聖^{せい} 一^{いち}

發 行 者 佐 藤 亮 二

發 行 所 株式會社 新 潮 社

郵便番 號 一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話東京(〇三)二六〇一一一
振替 東京 八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求
めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

繪 島 生 島
後 篇

舟 橋 聖 一 著

新 潮 社 版

目次

老やなぎ	七
風流小袖	六
棧敷の雨	二
うぐいす眉	二七
春淡月	一五〇
金蒔繪櫛	一八八
梅花一枝	三三五
うつゝ責め	二六二

露は尾花と……………二九五

高遠の雪……………三八

荒浪千鳥……………三五二

解説 八木義徳

繪
島
生
島
後
篇

老やなぎ

この頃、生島の歸りのおそいこと、時々朝まで歸らないこともあれば、直接、どこからか樂屋入りをして、宇津に待呆けを食わせることも、度々ある。

却て、この頃になつて誰云うとなし、生島が虎屋の菓子に化けて、大食おほじやう籠に乗つて千代田城へ忍び入つたと云う話が、人の口から口へと傳わつてゐるのを、宇津も耳にはさまぬではない。

それどころか、最近では、吉原見物の話にしても、切通しの町屋敷のことにしても、大方、知れわたつてしまつて、中には面白半分に、まるで見てきたような風説を流す者もある。

何しろ、浮名を立てるには、お誂えむきの役者と奥女中との戀だから、江戸八百八町に知れ渡つてしまつたと云つても過言ではない。當然、町奉行の役人も知つてゐるだらうし、御老中の耳にも入つてゐるだらう。宇津はそれを思うと、氣が氣ではないのである。と云つて、歸つてくる生島に、一語でも、諫言立てのようなことを云えば、忽ち、不機嫌になつて、三日でも四日も口をきかないから、一つ家に暮らす宇津には、それが何よりの精神的苦痛である。

思いあまつた宇津は、或る日、生島の先輩格たる山中平九郎を、中村座の樂屋にたずねた。

平九郎は、寛永九年の生れと云うから、當時には稀に見る長壽の人であつた。瘦型で長身。音聲は哀愁を含んでゐるが、聲量は大で、高齡のために、齒が缺けていたので、口跡くちせきは、洩れるよ

うだつたが、譯はよくわかつたと傳えられる。

「こりや、三浦屋のところの妹さんかえ。まアお入り——」

敵役が得意で、舞臺では恐怖を以て人を襲うに長じていたと云われる平九郎だが、一旦、舞臺を下りると、まことに優しい好々爺であつた。宇津は、樂屋の入口に膝をついて、

「これから舞臺へお出になるところだつたンじやありませんか」

「何アに、まだ、二幕ほど、身體があいているので、退屈をしていたところさ」

「それじやア、一寸、御免下さりませ」

「さあ、どうぞ。遠慮なく、こつちへ」

「ありがとうございます」

と、宇津は赧くなりながら、疊のほうへ上がつて、かしこまり、

「いつも、御無沙汰ばかりして申譯もございませんが、今日はほんとに、思いあまつて、御相談に上りましたンで」

「ホウ。私のような老人に、若い御婦人が何ソの相談か知らないが、折角そう云つて、たよつて來て呉れたのは、年寄冥利と云うもンだ。相談とは、何ですえ。何ンでも腹藏なく云うがいいや」

——と見ると、宇津は雙の眼にキラキラ光るものをたゞえている。

「親方さん——まア聞いて下さいまし。義兄さんと大奥の繪島様とのいやな噂でございます。私もはじめは信じられない事だと思つて居りました。でも、この頃のように、歸つて來ない晩が近づきますと、やつぱり噂に違わず、恐ろしい御法度破りの戀に狂う人になつたかと、心配で心配

でなりませぬ」

平九郎は、ソロソロ、顔にかゝりながら、

「そんなに、家を明けなされるか」

「へえ。そりやまア、姉さんが死んでからは、きまつた人がいるじやアなし、たまには、吉原へ泊つて来たとして、ちつとも不思議はございません。でも、普通に男が傾城を買つて遊ぶのとは違つて、歸つて来た朝の只ならぬ顔色を見るだけでも、二人の戀が道にはずれ、可恐いお仕置を、目の前に見ているのがわかります。自分でも氣が咎めるのか、私がずい分心をつかつて物を云つても、すぐ揚足を取つて、八ッ當りを致します。家中のものが、まるで腫物に觸わるようでございますよ」

「もともと、三浦屋は若いときから疳癪もちのほうだつたが——そいつは、まわりの者がたまらねえのう」

「でも、その位のことでは済むなら、家の者は、みんな辛抱するつもりで居りますが、若し、このことが、發覺しましたら、どうなりましょう」

「そりやア、表沙汰にでもなつた日には、輕くて遠島。重ければ、打首だよ」

「そんなことになつたら、どう致しましょう。それに、大奥の御見物は大ぜいですから、どうしても連累者が出ましようし、役者衆からも、數珠つなぎになる心配は十分にございますよ。それを考えると、可恐くて可恐くて、夜もオチオチ、眠れないほどでございます」

と、宇津は袖に顔を押しあてる。

「なるほど、そりやア心配なことだ。それでなくとも、役者と云うと、一口に河原乞食などと云

つて、人まじわりのならぬように云う者が多いンだから、そこへまた、丹前役者の新五郎が、御法度の奥女中と、乳くり合つたお咎めで、遠島の、流罪のと、世間を騒がせたとなれば、それこそ、芝居道はまつ暗だ」

「さしずめ、山村座などは、御取り止めでございませうか」

「そうよな。話では、太夫元も同類で、繪島様と生島の仲を取りもつ御役を果たすとやら云うことだから、まア二度と芝居を開けることは許されないう」

さすがに芝居の小屋裏は、どこよりも早く、情報の集る所だから、知らない顔の平九郎でさえ、すでに相當の風聞は聞いているのだつた。

「就いては親方さん。誰よりも長老のあなたから、一度きつい御意見を、義兄さんの骨身にこたえる程までに……お願いしたいンでございしますが、引きうけては下さりますまいか。それが云えるのは廣い世間に親方さんしかありません。それでこうして伺つたンでございしますよ」

「そうかい。そりや却て痛み入るね。この老人をそこまで見込んで呉れたあんだの氣持は有難い。だがね、お宇津さん」

鏡臺にむかつて平九郎は、敵役らしい太い眉を描きながら、時々、宇津の顔を見た。

「年寄には、この役はちと重い——重すぎるンじやアないだろうか」

「へえー」

「相手は今、全盛の生島新五郎。そりやア、年嵩ということになれば、確かにあつしが先輩だ。寛永生れなして役者は、どつこにもころがつちやア居りません。上方の藤十郎さんだつて、あつしよりは、ずつと年下の筈だ。でも、世の中は、年嵩だけで、けじめのつくものでもねえ。殊に

役者は藝の世界。云つて見りやア、實力だけが物を云う。こんなことは、何もあつしが、若い人に説教するまでもなく、御承知だろう」

「いえ、いえ。親方のお口から伺えば、一層心に染みて聞こえます」

「そこでだ——實力の順で云えば、生島と市川、三浦屋と成田屋では、どつちを上とも下とも云われねえ役者の代表だ。それほどの人に向かつて、いくら年寄でも、先輩顔を吹かして、とやかく云うなアまア苦手だ」

「でも——」

「待ちな。そりやア舞臺の上の工夫なら、そこは経験と云うことがあるから、若い人の手を取つて、教えてやらねえものでもない。また、芝居の相手に出るからは、おたがいに、註文もあれば、助言もしよう。ところが、あしたの話は、舞臺以外の品行のことだ。こりやア、いくら年嵩でも、うつかりしたことは、云われはしないじやないか」

平九郎の話は、一語々々、もつともなので、宇津も返す言葉がない。

折から、チョーンと柝が鳴つて、はや幕切の柝の頭である。平九郎は、

「アタマ——」

と呼んだ。それから、一服喫いつけて、

「だからよ、三浦屋とすりやア、あつしの意見なンぞ、聞いているのも面倒だから、あとで、おいぼれ奴、うるせえ御託を並べに來やアがつたと、腹の中でおさまる道理がありやアしねえよ」

「そんなに、思い上つてしまつたンでございましょうかね、うちの義兄さんは……」

と、宇津は、目をうるませる。

「誰だつてそうだ。あつしだつて、四十五十の働き盛りには、誰の言葉も耳へなンぞ入れなかつたよ」

床山の若いのが、鬘をもつて入つてきて、平九郎の頭にかぶせた。鏡にむかつて、おくれ毛をなでつける。宇津は粘つて、

「親方——そこを、たつてのお願いなンでございますよ。親方さん——出場を前にして、くどいようではございますが、今、うちの義兄さんが、喜んで話をきくのは、親方のほかはありません。それも、たゞ、義兄さんの不品行を叱つて戴くだけでなく、芝居道全體のために、口をきいて下さるわけには参りませんでしょうか——」

涙を拂つた宇津の目には、容易ならぬ決意が窺えた。

「芝居道——」

平九郎も亦、さつきからくりかえされる芝居道の一言が胸の奥まで突き通るような氣がした。

「はい。これを放つておきますれば、早晚、役者全體の侮りとなるは知れて居ります」

「召捕りのことでは、何か心當りでもあるのかいね」

「御老中土屋相模守が、幾度か決意をあそばしては、一日延ばしになさつて居るのだと云う噂もきいて居ります」

どこから聞くのか、宇津はそんなことまで知つていた。

「若し、義兄さんがお召捕りにでもなれば、どうにか、人並に往來が歩けるンじやアないかと喜んでゐる私共まで、また日蔭を選んで暮らさなくつちやアありません」

「なるほど、こりやアあんだの云う通りだ。三浦屋が召捕りにでもなれば、芝居の繁昌もありや

アしない。奥女中が、宿下りのたびに、女方おなま買いをしているなア、周知のことだから、それからそれと、芋臺で御用となりやア、木挽町も堺町も、灯の消えたようになるだろう。こりや一番、思案をきめざアならねえな」

老優平九郎も、宇津の言葉に決意を迫られると、久しぶりに臟の中を、新しい血がわき立つ思いたつた。

「とにかく、舞臺へ行つてくるから、この幕のすむまで、暫くこゝで、待つていてお呉ンなさい」

「かしこまりました」

平九郎は、衣裳をつけ終ると、男衆に附添われて、舞臺へ出て行く。

あとは、宇津がたつた一人。と見ると、既に峠を越した老優には、誰も側に待する者もないと見えて、鏡臺のまわりが、大分、よごれている、白粉壺をおく盆の上にも、埃がたまつていたり、牡丹刷毛がアベコベに、刷毛箱に突つこんであつたりするので、宇津はそれを拭いたり片付けたりして、始末をした。もつとも、これが寛永生れの老優だからいいが、若い役者の鏡臺まわりを掃除したりしたら、一度にパツと、浮名の立つところである。

「三浦屋のおかみさん——お茶を」

年若の部屋子が、何を勘違いしたか、宇津を生島の女房と早合點して、茶碗をさし出した。宇津は辯解してもはじまらぬので、ニツコリ笑つて、茶碗を取つた。

ひよんなことからわらない仲となつた繪島との行末を思うと、生島とて悩みがないわけではな

もつとも、二人の戀は、筋として一向に間違つてゐると思われない。生島に女房はなし、繪島にも、きまつた亭主があるわけではない。愛情の認識がたかまるにつれて、二人が夫婦になるのを樂しみにするのは當然である。たゞ封建社會に於ける身分の優劣という事は、今日の常識では、到底推し量りきれないものがある。それ故に、世間の指彈を受け、生きる自由さえ失う例は、少くなかつた。

生島とて、血氣にはやると云う年でもないのに、繪島との間に、越えがたい封建の埒があることは、百も承知している。それなのに、こんどは自分でも怪しむ程、高鳴り騒ぐ情熱の火に魅入られて、日に夜に、深味へとはまつて行く。

（お身のやつてゐることは、たゞ破滅への道を急ぐだけではないか）
と、囁く聲が、彼の耳底を觸る。

（相手を誰だと思つてゐるのだ。大それたことと怖れおののかないのか）
また、別の囁きが、

（いつそ、女を連れて、墮落ちをしてしまつたらどうだ。役者をやめ、舞臺からいさぎよく身を退いて、遠い山家へでも隠れてしまふなら、ともかくもだ——大江戸のまん中で、丹前役者と謳われる生島新五郎が、飛ぶ鳥おとす大年寄の繪島と、濡れ場を地で行こうつたつて、そうは間屋が卸さない。それがわからぬお前でもあるまいに、——）

（山村座の座がしらをつとめながら、身分の違ふ女と添おうつたつて、そうは兩方共、うまく行くわけがない。女を取るか、舞臺を取るか。一か八かだ。愚圖々々していると、虻蜂取らずで、

兩方を失うことになるンじやないのか」

武士と町人とは身分が違ふ。その町人の中でも、河原者と賤しめられる役者は、またその下に屬する。一方、繪島は女だが、大奥に勤める高位の階級の所屬である。そこに若し、接觸の事實があればあきらかに罪案を構成する。しかも、周圍に、御用商人と官邊との贈收賄が行われているとすれば、更らに複雑な疑獄が成立する公算は大きい。

この頃、生島の頭の中には、そうした不安が、細かい粉末のように充滿して、とかく、胸苦しい朝夕を送っている。

——秋空は青いが、霧をふくんだ朝風が、人の肌に寂寞を吹きおくる日。

「ごめんなさいよ」

と、表戸口に聲がして、誰やら案内を乞う様子。

生島は、千秋樂の翌日とて、まだ床の中で目をさましたまゝ、一服喫っている所だつた。宇津が玄關へ取次ぎに出て行く……。

「義兄さん、お客さんでござんす」

襖は明けず、階段の上り口で、宇津の聲がした。

「誰方だ——」

「平九郎の小父さんでございます」

「何に、平九郎の小父さんとは、珍しいこともあればあるもんだ。じやア、奥の間へお通しするがいい。あつしはすぐ顔を洗つて……」

平九郎と聞いては、生島も寢てはいられなかつた。